



みなみ くんぞう

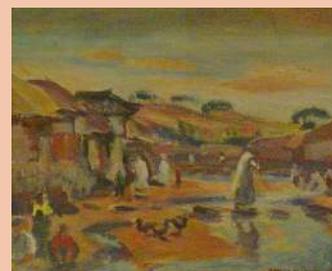
南 薫造

1883（明治16）年生

1950（昭和25）年没



《鶏小屋》1947年



《朝鮮風景2》1926年

描いた動物は……とり！

【参考文献】

- ・『生誕100年記念 南薫造展』図録
広島県立美術館、1983年
- ・岡本隆寛、高木茂登編
『南薫造の日記・関連書簡の研究』1988年
- ・南八枝子『洋画家南薫造 交友関係の研究』
星雲社、2011年

1. 南薫造と東京美術学校

賀茂郡内海町（現在の呉市安浦）に生まれた南は1902年、19歳で東京美術学校に入学し、岡田三郎助おかた さぶろうすけに師事します。同期には平井武雄ひらい たけおらがいたほか、2学年下の富本憲吉とみもと けんきちとはマンドリンという楽器を通じて親しくなりました。美術学校の学友たちとは、卒業したあとも各々の留学先から文通するなど、生涯に渡って親交を深めました。その後1932年から43年までは、教授として東京美術学校で後進の指導にあたり、荻太郎おぎ たろう、野見山暁治の みやま ぎょうじ、新延輝雄にいのべ てるお、渡辺武夫わたなべ たけおなどが南のもとで学びました。

2. ヨーロッパでの生活

1907年3月に東京美術学校を卒業した南は、その年の9月イギリスに渡ります。ロンドンのボロー・ジョンソンのもとで2年間学んだあとは、パリに移り1910年1月まで滞在しました。この期間にはイタリア、ドイツ、オランダなど欧州各地を訪ね、西洋美術に多く接しました。同じく留学生だった高村光太郎たかむら こうたろう、白瀧幾之助しらたき いくのすけ、有島壬生馬ありしま みぶまや南に1年弱遅れてロンドンへやってきた富本とは、たびたび一緒に各地へ旅行やスケッチに出かけました。

3. 芸術家団体とのかわり

帰国した南はさっそく洋画団体である白馬会への出品、白樺社主催の「南薫造・有島壬生馬滞欧記念絵画展」の開催など精力的に活動します。これらを機に同時代の芸術家たちとさらに強く結びつき、西洋美術を紹介していた文芸雑誌『白樺』の表紙絵も担当しました。また、文展、光風会展などに作品を次々と出品し、文展ではのちに審査員をつとめるまでになりました。西洋を知る日本の洋画家として、南は大正から昭和期の画壇を形成するひとりとなったのです。

4. 国内外へのスケッチ旅行

滞欧中に各地へ足を運んだ南ですが、帰国後もスケッチのためたびたび旅行に出かけました。長野、北海道、奈良など日本各地のほか、1925年5月には画家の辻永つじ ひさしと朝鮮を旅行しました。《朝鮮風景2》はこの旅行のあとに描かれたものです。南の作品全体を通じてみられる印象派的な光の表現と自然の美しさは、実際に戸外でのスケッチを惜しまなかったことで培われたものなのでしょう。